

全校の皆さん、おはようございます。

二期期が始まりました。年度の中で最も長い二期期です。一年生は東本願寺研修、二年生は修学旅行と、大きな宿泊行事があります。また三年生は本格的に進路に向けて動き出す時期となりました。

先のことに対する不安もあるかもしれませんが、どちらかというところ、終わってしまった夏休みに対する名残惜しい気持ちを持っている人が多いのかもしれない。「あんなにたくさん時間があつたはずなのに、私は何をして過ごしていたのだろう」と、後悔の気持ちを引きずっている人もいるでしょう。

今日は「後悔」ということについて、『歎異抄』にある親鸞聖人のお話を紹介したいと思います。

親鸞聖人が御在世のとき、遠く関東から親鸞聖人の門弟たちが、念仏の教えが正しいのかどうかを確かめるため京都までやって来ました。その門弟たちに対して親鸞聖人は、先生である法然上人から受けとった念仏の教えについて、「もし仮に法然上人にだまされて念仏して地獄に落ちたとしても、私は決して後悔はしません。」と語りました。そこまで先生のことを信じているのか、とも感じますが、果たしてそれだけで「地獄におちても後悔はしない」と言い切れるのでしょうか。

親鸞聖人は「後悔しない」という中身を次のように語ります。「さまざまな努力を積み重ねることによって仏になることのできる身が、念仏という行為で地獄におちたのなら『だまされた』という後悔もあるのだろう。本来、どのような自力の努力によっても仏になることのできない身であるから、どうあがいても地獄は私の必然的な居場所なのである。」

この親鸞聖人の言葉から、人間の「こんなはずではなかったのに」という後悔の正体は、「こうすればこうなるはずだったのに」という、いつの間にか自分が抱いていた「期待」であることが分かります。

身勝手な「期待」を持つてしまうと、それが外れて「後悔」になるのです。「期待」というと、きれいな言葉に聞こえますが、その正体を親鸞聖人は、自分や周りのことを自分の都合のいいようにしようとする傲慢な気持ちであると見抜きます。親鸞聖人が示してくださっている念仏の教えは、私たちが力一杯その手に握りしめている「期待」を手放す道です。それは、自分の都合が叶うかどうかという狭い生き方を超え、あらゆることが「有り難い」、驚きと感動に満ちた道なのです。

これで朝の法話を終わります。朗読は佐藤でした。